

医史学と私

赤松金芳

私は昭和二年一月大阪から、富士川游先生の居住されている鎌倉へ移住して来た。そして富士川先生から、医史学、児童学、宗教、その他につき親しく御指導を頂くことができた。

まず最初にドイツ語をもう少し勉強しなさいということとその勉強を始めた。そしてまた富士川先生御所蔵のヘッケルの『宇宙の謎』の原書を訳することを命ぜられたのでその訳に取り組んだ。

そしてまた、私が薬物の歴史を勉強したいと申し上げたら、先生は「それなれば薬物に関する古書をよく調べる必要である」といわれ、先生の御蔵書の遠藤元理の『新製剤記』を出されて「まずこれを筆写しなさい」といわれ、「ただ読むだけでなく筆写することによって記憶が確かになる」とのことであるので、私はそれを原稿用紙に筆写することを始めた。そして、それに次いで小野蘭山の『本草綱目啓蒙』の筆写に取りかかった。

さらにまた、富士川先生の女婿である福田得志教授の千葉医科大学薬物学教室へ、昭和三年二月より専攻生として入室して薬理学の勉強をすることになり、始めしばらく千葉で下宿したが、やがて鎌倉から千葉へ隔日に通い、フラボン化合物の薬理作用の研究をつづけた。

かくて私は昭和四年三月四日、東京内山下町東洋ビル四階の中山文化研究所（所長は富士川先生）で開かれた日本医史学会の医家先哲追薦会に始めて出席した。そして富士川先生の紹介で日本医史学会の会員に加入させて頂いた。これが医

史学と私との関係の第一歩である。

そして日本医史学会の機関誌『中外医事新報』の昭和七年九月発行第一一八七号に、初めて私の原著「古書に見えたる薬理学的実験」が掲載された。

次いで昭和八年九月十四日、中山文化研究所で開催された日本医史学会例会で私は「金光明最勝王経の薬物」について初めて講演した（この原著は同年十一月発行の『中外医事新報』第一二〇一号に掲載）。

また同年十月五日、東北帝国大学医学部で医史学講演会が開催され、富士川先生と藤浪剛一慶応大学教授とが講演され、同時に医史展覧会が開かれたので、その陳列のため私は富士川先生に随行した。

さらに同年十月二十九日、谷中了浣寺で奈須柳村追悼の医史学会で富士川先生の講演があり、私もそれに出席した。

昭和九年四月、東京帝国大学で第九回日本医学会が開かれ、その第一日に安田講堂で富士川先生は「医術の史的考察」と題して総会講演をされ、講堂の廻廊で医史展覧会が開かれ私はその陳列の手伝いをした。また、第一分科会として医史学が始めて参加し、私は「底野迦史追加」を講演した（この原著は同年七月の『中外医事新報』第一二〇九号に「底野迦考」として掲載）。

また同年十二月四日より長崎医科大学で富士川先生の医史学講義があり、私は助手として随行した。

昭和十年四月二十四日、上野科学博物館でシーボルト展覧会が開かれ、また五月六日には帝国ホテルで「シーボルトを偲ぶ夕」が開かれたので、私は富士川先生のお伴をして共に出席した。

また、同年十月三十日、東北帝国大学医学部で富士川先生の医学史特別講義があり、私はその助手として随行した。

そして同年十二月一日、早稲田大学大隈講堂で宇田川榕庵記念講演会があり、私は富士川先生に随行して出席した。

昭和十一年三月四日、東京医師会館で医家先哲追薦会が開催され、同時に行われた医史学資料の展示に私も陳列を手伝った。

同年五月十三日、新潟医科大学で富士川先生の医学史講演にも私は助手をつとめた。さらにつづいて五月二十七日より九州帝国大学医学部でも富士川先生の定例医学史講義があり、それにも私は助手として随行した。

昭和十二年四月三日、私は富士川先生と東京帝国大学医学部の病理学教室五十周年記念展覧会へ行き、精神衛生協会の講演を聞いた。

そして同四月十四日、中山文化研究所で日本医史学会の例会があり、同時に開かれた理事会で私が同会の編集委員に選ばれた。それで前任者の平塚俊亮氏より事務の引き継ぎを受けた。そして本郷西片町の医史学会事務所で機関誌の『中外医事新報』の編集に従事した。当時の『中外医事新報』は月刊で、早速その四月号から私が編集にとりかかった。

昭和十三年三月四日、東京医師会館で医家先哲追薦会が開かれ、三浦梅園百五十年忌を記念して、富士川先生の講演があり私も出席した。

また同四月、京都帝国大学で第十回日本医学会が開催され、医史学はその第一分科会として参加し、第二高等学校を会場として医史展覧会を開き、かつ同校講堂で医史学部会を開催し、私は「平安朝時代の臓器薬」について講演した（その原著は昭和十四年十一月及び十二月発行の『中外医事新報』第一二七三—四号に掲載）。

ところで、その昭和十三年十一月八日、入沢達吉理事長が逝去され、十一日の告別式に私は参列した。次いで同十九日築地本願寺で土生元碩碑の除幕式が行われ私も出席した。

昭和十四年三月四日、例により医家先哲追薦会が東京医師会館で行われ、同時に日本医史学会総会が開催され、富士川先生が三代目の理事長に推薦された。

そして同四月九日、下総古河の一向寺で医史学会の例会を開き、田代三喜について富士川先生が講演され、私も出席した。

また、五月二十日には千葉医科大学で医史学講演会が開催され富士川先生が「医史学の研究及びその応用」につき講演

され、同時に開かれた医史展の陳列を私が担当した。

次いで九月十八日には大阪市立大学医学部附属病院の恵濟団大ホールで杏林温故会と弘仁会医学史研究会との共催で医学史展が開かれ、私もそれに参加した。そして十八日には富士川先生の講演があった。

昭和十五年三月四日恒例の医家先哲追薦会が東京医師会館で奈須柳村百年忌、青木周弼七十七年忌、同研蔵七十年忌を記念して開催され、富士川先生は「奈須柳村先生」につき講演された。そして奈須・青木両先哲の遺著・遺墨等の展示を私が担当した。

ところで富士川先生には胆石症の持病があり、時々それが再発することがあり、その都度温泉療養などされていたが、昭和十五年十月、また胆石症で臥床され療養に努められたが、つい胆嚢炎を併発され、十一月六日逝去された。まことに痛恨の極みである。

そして同十八日、築地本願寺で日本医史学会を始め、富士川先生関係の諸団体の合同で「富士川游先生追悼法要」が行われ、私も実行委員の一員として参列した。

また同十二月四日、中山文化研究所で、日本医史学会としての富士川先生追悼会が開かれ、私は「富士川先生の御病牀に候して」と題して追悼の言葉を述べた。

そして、その時の理事会で藤浪剛一慶応大学教授が四代目理事長に選ばれた。また私も幹事として、引き続き編集を担当することになった。

また昭和十六年一月号の『中外医事新報』より『日本医史学雑誌』と改題して刊行することになった。ただし号数はそのまま継続した。

そして私は、その一月号（第一二八七号）より七月号（第一二九三号）の七回にわたって「富士川先生語録」を連載した。これは先生が私に折りにふれて話された医史学その他医学関係のことをメモしてあったのを整理集録したものである。

る。

またその三月号（第一二八九号）に私の「日本薬物学小史」を執筆掲載した。

ところが、この昭和十六年四月に富士川先生の大著『日本医学史』が日新書院から決定版として復刊された。これは先生の御生前から企画され、旧版の『日本医学史』を解いて朱筆で訂正加除された原稿を日新書院に渡されていたものである。そしてその最初の少しばかりを先生が校正されたが、御病気のため中止になっていた。それで先生歿後、先生の嗣子の富士川孝雄氏から私にその校正の依頼があったので、私も喜んでお引受けをし、全力をあげて校正して、ようやく刊行された。

そして十一月六日の先生の一周忌には、日本医史学会その他諸団体合同で丸の内中央亭で追悼記念講演会が開催され、別室には新刊の『日本医学史』を始め私の所蔵の先生の遺著遺墨などを展示した。

昭和十七年三月、第十一回日本医学学会が東京帝国大学で開催され、その第一分科医史学部会で、私は「河豚考」について講演した（この原著は『日本医史学雑誌』十月号・第一三〇八号に掲載）。

ところで同年十一月二十九日藤浪理事長が狭心症のため逝去され、十二月二日青山斎場で葬儀が行われ私も参列した。そして同月四日、東京医師会館で開かれた日本医史学会理事会で、五代目理事長に山崎佐博士が選ばれた。

昭和十八年一月の日本医史学会例会は藤浪前理事長の追悼の意味で開いたが、二月七日さらに小石川後楽園涵徳亭において、日本医史学会その他藤浪博士関係諸団体の共催で同博士の追悼会が催され、私も参列した。

同年二月二十二日糖業会館で開かれた尚薬会で私は「宇田川榕庵伝記」について講演した。

また三月四日東京医師会館で開かれた医家先哲追薦会及び日本医史学会総会で、私は「我が国医書における最初の解剖学的記載」につき講演した。

さらに五月四日、神田一ツ橋の如水会館で開かれた日本医史学会と日本科学史学会との合同連合会で、私は「宇田川榕

庵の舎密開宗」について講演した。

昭和十九年六月発行の『日本医史学雑誌』第一三二八号の研究余録欄に、私は「シーボルトの船室に積み込まれたる薬物と同船によりて齎らされたる書籍」につき執筆し、さらに同八月号(第一三三〇号)の同欄に「宇田川榕庵所蔵の薬物」につき掲載した。

また、同九月十四日東京医師会館で開催の日本医史学会例会で、私は「尺素往来に見えたる薬物」につき講演した。そして十一月発行の『日本医史学雑誌』第一三三三号に、私は「桂川甫周の和蘭薬選」につき執筆掲載した。

ところがその『日本医史学雑誌』も、戦争がいよいよ苛烈となり、用紙の配給が困難となったため、その十二月号(第一三三四号)をもって一時発行を中止するに至った。また私も鎌倉から東京への通勤も困難となったので編集委員を辞退することになり、残務は大鳥蘭三郎氏に引きついでもらうことになった。

以上、主として戦前の日本医史学会を中心として私の医史学につき述べたが、そのほか帝国学士院で紀元二千六百年記念事業として『明治前日本科学史』を編纂することになり私もその編纂嘱託となり、医学史担当に稲田竜吉先生、薬物学史担当に朝比奈泰彦先生が当られ、私はその両方の打合会に出席したが、結局、私は薬物学史の方を執筆することになり、その資料収集のため長崎へ出張したりして、ようやく原稿をまとめたが、これも戦争のため出版不能となり中断するに至った。昭和二十年八月十五日戦争終結の日を迎えた。そして同年十一月六日東京大学で戦後最初の日本医史学会例会が開された。

また昭和二十一年十一月六日には銀座交詢社で富士川先生追悼記念会が開かれた。

次いで昭和二十二年三月四日順天堂で医家先哲追薦会が久し振りに開かれた。そして十一月二十九日には千葉医科大学で日本医史学会が開催され、私は「サントニンとマクリの史的考察」を講演した。

また、同年十二月には学術書院より富士川先生講述、赤松金芳筆録の『世界医学史』が刊行された。これは昭和十二年

以来先生が九州帝国大学医学部及び東北帝国大学医学部における医史学の定例講義や、長崎、新潟、千葉などの医科大学における医史学講演に私が助手として随行したとき筆記したものを經とし、先生の著書『療法の歴史』『治療の知識及び方術の推移』『日本医学史講』等を緯として編纂したものである。

昭和二十三年五月福田得志教授の推選で、九州帝国大学医学部で富士川先生の後を承けて、私は非常勤講師として同月二十四日より二十九日まで医史学の集中講義をした。

また、三共株式会社の子科樵作氏の依頼で同社発行の雑誌に「名医列伝」を書いて欲しいとのことで、私は昭和二十五年一月の『医業』第十三号に「永田徳本」、三月発行の『治療業報』第四六五号に「田代三喜」、同四月号（第四六六号）に「前野蘭化」、六月号（第四六八号）に「杉田玄白」、同八月号（第四六九号）に「曲直瀬道三」、同九月号（第四七〇号）に「後藤良山」、昭和二十六年三月号（第四七五号）に「香川修徳」、同五月号（第四七七号）に「山脇東洋」、同六月号（第四七八号）に「吉益東洞」を執筆掲載した。

昭和二十六年四月、東京大学で第十三回日本医学会総会が開かれ、その第一分科医史学部会で、私は「長崎出島に輸入された蘭薬について」を講演した。

昭和二十七年四月二十六日、慶応大学北里図書館で日本医史学会が開かれ、私も出席した。

昭和二十八年一月、医歯薬出版株式会社発行の「くすし」第四号に、私は「我が国の古医書」を執筆した。

ところで同七月内山孝一氏が日本医史学会六代目理事長となられ、同九月には私は評議員に選ばれた。そして十月十五日、日本医史学会関西支部発行の『医譚』第二十号に、私は「宇田川榕庵の舎密開宗未刊本」を執筆掲載した。また十二月十二日、駒込の医歯薬出版談話室で開催の日本医史学会例会で、私は「前野蘭化と富士川先生」につき講演した。

また昭和二十九年四月二十四日、同じく医歯薬出版で開かれた日本医史学会例会で、私は「江戸時代における日の吉凶と医事衛生」につき講演した（この要旨は五月、医学書院発行の『医文芸』第一巻第五号に「日の吉凶と医事衛生」と

して掲載)。

そして同年十一月六日、富士川游先生伝記刊行会から『富士川游先生』が刊行された。これはかねてより先生の伝記刊行の要望があったので、先生に親近の人々が、その伝記刊行会を結成し、事務所は私の自宅に置き、会員を募集して、茲に刊行された。内容は、「先生の生涯」を富士川英郎氏、「先生の思想、宗教」は三枝博音氏がそれぞれ執筆、私は「先生の言葉」および年譜を執筆した。

昭和三十年十月一日、横浜市立大学医学部で日本医史学会関東地方会が開かれ、私は「明治初年の新聞に見えたる横浜における医事」につき講演した(この要旨は三十一年八月発行の『医譚』第二十八号に「明治初年の新聞紙と横浜の洋医」として掲載)。

昭和三十一年三月四日、東京医師会館で医家先哲追薦会を開き、小塚原観藏百八十五年、杉田玄白百四十年の記念講演会があった。

同四月二十二日、東京大学医学部本館で日本医史学会総会が開催され、私は「カンフル考」を講演した(要旨は『日本医史学雑誌』第六卷第三号に掲載)。

昭和三十二年二月、日本学士院編『明治前日本薬物学史』第一巻が刊行された。これは戦前に学士院で『明治前日本科学史』の編纂が企てられたが、戦争のため中断していたのが戦後ようやく刊行の運びとなり、『医学史』五巻、『薬物学史』二巻も順次刊行されるに至った。この『薬物学史』第一巻に私は「古代の薬物、南蛮医方の薬物、和蘭医方の薬物」を執筆した。

また三月三日、日本医学会、日本医師会、日本医史学会共催で日本医師会館で『蘭学事始』記念会が開かれ、私も出席した。また、六月八日には横浜の神奈川県立図書館で杉田玄白展が開催され、日本医史学会の例会も開き、私もまた出席した。

同十月二十日に慶応大学基礎医学教室で日本医史学会例会があり、私は「和蘭薬選」につき講演した。

昭和三十三年四月十三日、日本大学医学部講堂で日本医史学会例会が開かれ、私は「磐石考」につき講演した（要旨は『日本医史学雑誌』第九卷第一号に掲載）。

なお同七月一日、南山堂発行の『薬局』第九卷第七号に「曼陀羅華考」を私が執筆掲載し、また十一月には『昭薬』第四号に「薬祖神」につき掲載した。

昭和三十四年三月三十日、小塚原回向院にて戦災で破壊された観音碑の再建除幕式が挙行された。

昭和三十五年四月、小川鼎三博士が日本医史学会の七代目理事長に就任された。

同年五月十五日、東京大学医学部本館で日本医史学会総会開催、私は「広島における蘭学の始祖中井厚沢」につき講演した（要旨は昭和三十七年三〜四月『日本医史学雑誌』第九卷第三〜四号に掲載）。

同年十一月十四日、市ヶ谷の日本歯科医師会館でイーストレーキ百年記念会があり、私も出席した。

昭和三十六年十一月、日本医史学会関西支部の『医譚』第四十一号に「安息香」掲載。

昭和三十七年五月二十日、慶応義塾大学医学部講堂にて日本医史学会総会開催。私は「江戸時代の食療書と食道記」につき講演した（要旨は『日本医史学雑誌』第十卷第一号に掲載）。

昭和三十八年七月二十日、横浜市立大学医学部で、日本医史学会と日本薬史学会との共催で「鑑真記念講演会」があり、十一月九日には横浜の神奈川県立図書館で権田直助展あり、私はいずれへも出席した。

昭和三十九年二月、『日本医史学雑誌』第十卷第二〜三号に私は「中井厚沢とその著書『粥離力考』」につき掲載した。

また同年五月二十四日、順天堂大学医学部五号館講堂で日本医史学会総会があり、私は「並河天民自筆稿本『雑療方』」につき講演した（要旨は『日本医史学雑誌』第十一卷第二号に掲載）。

昭和四十年五月十六日東京大学医学部図書館で日本医史学会総会開催。私は富士川先生生誕百年に因み「富士川先生の

別号と筆名」につき講演した（要旨は『日本医史学雑誌』第十一卷第二号に、また原著は『医譚』第四十八号に掲載）。

そして同日、同図書館講堂で富士川先生生誕百年記念会を開き、私は開会の辞を述べ、日本医史学会、日本児童学会、正信協会の各代表がそれぞれ先生の遺徳を偲んで講演され、また別室には先生の遺著遺墨写真その他を展示した。

昭和四十二年四月二十三日、千葉大学記念講堂で私は「医史学の動向」につき講演した。

昭和四十三年五月、私は日本医史学会の理事に推選された。そして九月二十八日、北里図書館で開かれた日本医史学会例会で、私は「医史学会の沿革」につき追加講演した。

また十二月十一日、富士川孝雄氏より今回、平凡社より富士川先生の『疾病史』を復刊するにつき、その校正を依頼されて承諾。

昭和四十四年二月、私の校正した富士川先生の『日本疾病史』が平凡社の東洋文庫本として刊行された。

同五月二十五日、お茶の水、日大歯学部大学院講堂で日本医史学会総会開催。私は「湊長安の丹靖堂随口任筆」につき講演した（要旨は『日本医史学雑誌』第十五卷第二号に掲載）。

昭和四十五年六月七日、千葉、文化会館で日本医史学会総会開催。私は「享保十五年製剤記」につき講演した（要旨は『日本医史学雑誌』第十六卷第一号に掲載）。

昭和四十六年四月五日、神田一ツ橋講堂で日本医史学会総会が開かれ、私は「緒方郁蔵訳述富士川治筆写『薬性新論』につき講演した（要旨は『日本医史学雑誌』第十七卷第一号に掲載）。

昭和四十七年八月、形成社より富士川先生の『日本医学史』の復々刊本が刊行された。これは先きの日新書院の復刻版に、『日本医事年表』と私の執筆した富士川先生の著書目録及び年譜とを附録として添加したもので、さらにそれに京都大学図書館の『富士川本目録』を別冊として添付した。

昭和四十九年八月十七日東京三越で「解体新書二百年記念会」が開催され、その翌十八日銀座日産ギャラリーで日本医

史学会講演会が開かれ、私は「毎年三月四日解臈記念日に開かれた医家先哲追薦会と富士川先生作歌の琵琶『蘭学創始』について」を講演した（要旨は『日本医史学雑誌』第二十卷第三号に掲載）。

同年十二月広島で富士川先生顕彰会が結成せられ私もその発起人の一人となり、昭和五十年八月九日、広島大学医学部と富士川先生の郷里とに「富士川先生記念碑」が建立せられその除幕式が行われた。それで私は十月二十七日広島へ行き両碑を見、そして先生のお墓へもお参りした。

昭和五十一年五月十六日、日本医史学会総会で私は同会の名誉会員に推薦された。

以上、医史学と私とに関して、日記を繰りながら思い出すままに列記した。最後に、富士川先生の言葉「自分の職業の歴史を知らない者は、自分の親の名前を知らないようなものだ」と。

（日本医史学会名誉会員）